

『賽の河原にも咲く色花』

この世の果てにあるという色町「賽の河原」――

辿り着く人間のほとんどが傷を持つその色町にふらりと辿り着いた宿六という剣客。見た目からして銭を持たぬと分かるその男を誘う一人の女郎。女は彼岸花と名乗った。

彼岸花と二夜を過ごし、彼岸花からの勧めで色町の顔である疵という男に雇われた宿六は、暇の下で色町の様々な人生模様を見ることになる。

西町一の女郎と男の逃避行。

借金のかたに娘を奪われる爺、だが借金が消えてほっとしている爺と、どんな形であれこの逃げ場のない地獄から逃げ出すことを夢見ている娘。

かつては小町と謡われた病気持ちの腐れとそれを愛した少年の末路。

そして腐れを見つけてきた年増の女郎。

金のかたに女郎屋に買われた少女に施される厳しい礼儀作法と床作法、そして知る愛のない性。

小町に上り詰めながらも想い人と添い遂げることを願った為に殺された女。

女の仇を討とうと剣を握るも、女が願うことを悟り両目を抉り、命を断った剣客。

愛する女を守る為に他の全てを犠牲にすることを厭わない男。

色を知り、艶を纏い、小町へと駆け上がる小娘。

様々な人生模様の中で、宿六と彼岸花は境遇に苦しみながらも互いに惹かれあい、想いを重ね、愛を育んでいく。

だが、宿六の過去の罪から、宿六は疵から追われることになる。

それは宿六が以前、上役と不貞を働いていた妻を斬り殺しており、それより生国から追われる身であったのだ。

そして疵を操る賽の河原の上役は、その生国の上役と繋がっており、宿六は疵に追われることになってしまふ。

それを知った宿六は、彼岸花を連れて逃げる。ただならぬ様子の宿六を見て、彼岸花はこれまでに誰にも語らなかつた自分の過去を宿六に告げた。

彼岸花の本名は厄といい、飢饉の際にある神社に生贄として捧げられた赤子だった。だが隠され育てられ、村の権力者などの夜伽の相手として生かされていた。そして隙を見て逃げ出し、賽の河原に堕ちてきたのだ。

それを聞いても宿六は揺らがなかった。

だが宿六の強い想いを知った彼岸花は、宿六の腹を五寸釘で浅く傷付け、冷たい態度で突き放す。そ知らぬ瑕の下に戻り制裁を受けようとしたが、そこに宿六が戻り、激しい剣戟の末、二人は互いの胸を刀で貫き、死を選んだ。

「でんでらりゅう」と言つた女郎と男の童歌がある。

小町はそれを口ずさみながら、宿六と彼岸花を偲んだ。